

『クオリティ・オブ・デス』 ～ 『クオリティ・オブ・ライフ』との違い ～

2024年6月4日 新渡戸稲造記念センターから 順天堂大学保険医療学部理学療法学科での講義『病理学概論』(14:50～16:20)に向かった。教科書『カラーで学べる病理学』を用いて、約120名の学生と『腫瘍』【「腫瘍の分類と命名法」、「腫瘍の形態」：肉眼的形態、組織学的形態、「腫瘍の発生と発育」、「悪性腫瘍の進展と転移」：血行性転移、リンパ行性転移、体腔内性転移、「腫瘍と宿主の関係」：腫瘍が宿主におよぼす影響、宿主が腫瘍におよぼす影響、「腫瘍の原因と発生のメカニズム」：原因】の箇所を音読しながら進めた。真摯な学生の姿勢には、大いに感動した。

6月5日は、新渡戸稲造記念センターから 順天堂大学保険医療学部診療放射線学科で『病理学総論』(14:50～16:20)と『がん医療科学』(16:30～18:00)の2コマの授業に赴いた。『病理学総論』では『カラーで学べる病理学』の教科書を音読しながら『炎症』【「肉芽種性炎症」、「炎症の全身への影響」】と『腫瘍』の箇所を講義した。『がん医療科学』では『がん細胞から学んだ生き方 ～「ほっとけ 気にするな」のがん哲学』(へるす出版)の第4章【『「がん哲学」での「言葉の処方箋」』と第5章『「クオリティ・オブ・デス」(Quality of death)を考える』】の箇所を音読してもらい、質問を受けながら行った。

【『「クオリティ・オブ・デス」の視点』、『後悔しない最期を迎えるために』、『家族との絆を深くする「クオリティ・オブ・デス」』、『「クオリティ・オブ・デス」との出会い』、『自分はどう生き切るという意思』、『どういうプレゼントを残すか』、『家族にしこりを残したまま』、『がん患者のいろいろな心配ごと』、『死んだら天国で何をするか、夢をもつ』、『人との比較は無意味』、『延命治療と どう向き合うか』、『人生の目的とは何か』、『最後の5年間がいちばん大切』】

筆者は、2014年3月ロンドン大学で講演『がん哲学 われ21世紀の新渡戸稲造とならん』の機会が与えられ、『デス・カフェの提唱者』と面談し『クオリティ・オブ・デス』vs『クオリティ・オブ・ライフ』(Quality of life)の違いを実感した。